

空手道国際審判員と 地域ボランティア

— 私の人生を豊かにするための
ワーク・ライフ・バランス —

仕事と仕事以外の生活を調和させ、誰もが多様な生き方を選択できる社会づくり、ワーク・ライフ・バランスが注目されています。

私の場合はアンバランスの傾向にあるかもしれませんが、あることに生涯を通じて情熱を注げるということはとても幸せです。また、一人の市民として地域活動に参加すれば、公務員ライフを更に充実させることができると思います。

審判員として 世界の頂点を極めたい

技を決めた選手が爽快感を味わうように、審判員も選手の技に瞬時に反応できた時は、やはり爽快です。特に空手道競技は、鍛え抜かれた選手の、目にも止ま

らぬ早い技を見極めなければなりません。緊張と集中の連続で、少しの気の緩みが誤審に繋がります。大会が終わった後はどっと疲れが出る程です。しかし、そこで審判員の魅力でもあります。

「ヤー!!」その瞬間にすべて決まるのです。まず視覚が瞬時の動きを認識し、次に聴覚に空気を裂くような気合と呼ばれる声飛び込み込んできます。私はそれに反応し手刀を真上から振り下ろして、選手に負けないくらいの気合で腹の底から「やめ!」を掛ける。空手道組手競技で審判員が最も気を吐く場面です。

空手道の審判資格は、まず国内の資格をすべて取得した後、アジア空手道連盟の資格が6ランク、そして世界空手道連盟の資格が6ランクあります。私は世界の資格4ランク目までを取得しています。



高橋 昇

茨城県取手市政策推進部広報広聴課課長補佐

【たかはし のぼる】昭和34年生まれ。日本大学経済学部卒業。昭和57年取手市役所入庁。高校時代から空手道に勤しむ。勤務の傍ら空手道の活動を続け、平成19年に国際審判員の資格を取得。現在、全日本空手道連盟公認教士7段。地域のボランティアにも参画して実りある公務員ライフを目指す。

で、あと2つ、これを取って世界大会決勝戦で主審をするのが今の目標です。

世界の空手事情

空手道は今や世界175カ国に6千万人の競技人口を数える国際スポーツとして親しまれています。日本における統括組織としての財団法人全日本空手道連盟は、JOCと日本体育協会の公認団体として、国民のスポーツ振興と青少年の健全な育成、そして国際競技における競技力向上の一翼を担っています。

国際組織としては、世界空手道連盟を頂点として、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、オセアニア、アメリカと5つのブロックを統括する連盟があり、それぞれに各国の連盟が所属して構成されています。



国際審判員として第20回世界空手選手権大会、セルビア共和国にて、審判員整列、体格差をもろともせず、これぞ大和魂

昨年10月にセルビア共和国ベオグラード市で開催された、第20回世界空手選手権大会では、全16種目のうち日本のメダル獲得数は、金2、銀2、銅3でした。国別で3位という成績です。各国の競技レベルが均衡し、一国にメダルが集中しないのは良い傾向ですが、私も日本人として、日本空手界の一員として日本の巻き返しに力を尽くさなければと感じています。

空手道が世界に普及し、当初は日本の独壇場だった後、ヨーロッパ先進国に渡った日本人指導者の尽力により、フラン

ス、イギリス、オランダなどが台頭してきました。最近では東欧諸国の躍進が目覚ましく、世界大会の開催地だったセルビア共和国を始め、アゼルバイジャン、ガザフスタン、ボスニアヘルツェゴビナなどに強さを感じました。彼らを見てみると、訪れた平和の喜びをスポーツの世界で爆発させて楽しんでるように見えます。

今、世界空手界の悲願はオリンピック種目になることです。世界空手連盟もIOCの公認団体になっていますので、毎回新しい種目の候補にのぼっています。特に子供達に今まで以上に大きな夢を与えるため、オリンピック種目にしたところです。

世界を見て日本に思ふこと

空手道に携わっているおかげで、セルビア、モロッコ、マレーシア、中国、香港と各国を回ることができ、それぞれの文化に触れる機会に感謝しています。当然のことながら日本と比較して物事を見るようになり、日本という国の在り方や日本国民の心の持ち方に憂いを持つことも時折です。

世界大会に集まる選手の国を思うと、決して豊かでない国、安全でない国、個



国際審判員として第20回世界空手選手権大会、セルビア共和国にて、形競技主審として判定の瞬間

人の自由に制限のある国などがたくさんあります。どの点をとっても日本国民であることに感謝しなければなりません。

世界の人々を見ていつも思うことは、その元気さです。辛いことがあってもそれを跳ね除けようとするファイトを感じます。前へ進もうとする意欲、国民全体の気持ちの高揚を感じるので。国歌を高らかに歌う姿は、自国に対するこの上ない誇りと忠誠心の表れでしょう。

世界大会の会場となったセルビア共和国を訪れた時のことです。首都ベオグラード市はヨーロッパの歴史ある都市としての風格と、ドナウ川を始めとする豊かな自然に囲まれた静かなたたずまいを見



国際審判員として第10回アジアジュニア大会、中華人民共和国香港にて、組手競技ファイナルの主審を務める（提供:空手道マガジン月刊JKFan）（写真上）
第20回世界空手選手権大会会場、セルビア共和国ベオグラード市（写真下）

せていました。10年前まで戦争をしていたとは思えないほどの平和を感じさせてくれます。しかし、街を歩くと小さな子供を抱えてお金をせがむ女性や、老人の物乞いの姿も見られました。大会ではアメリカチームが入場するとブーイングが起きるなど、戦争の傷跡は人々の生活と心の中に歴然として残っているようです。

またある国を訪れた時などは、高級デパートの宝石売り場で、生まれたばかりの赤ちゃんに何百万円もする翡翠のペンダントを買い与える両親。そのデパートを出ると、障害者がお腕を持って物乞い

をしている。こんな光景が鮮烈に蘇ってきます。

そういう光景を見る度に、平和の尊さと政治が人々の暮らしに与える影響の大きさを思い、子供達の確かな未来のために大人が果たす責任の大きさを痛感するのです。

時の為政者は国民のために、ひと時も気を緩めることなく努めるべきです。そして私達公務員は、為政者と共に市民の幸福を担うことを職業として選んだのです。その責任は重大です。毎日試行錯誤してより良い方策を思案しなければなり

ません。

しかし一方で、一市民としての心構えとしては「あれがない」とか「これがない」とか、身の回りへの不満や要求、社会への責任転換といったことではなく、今あるものに感謝し、まず自分が頑張るという前向きな心を、一人一人が持つことが大切であり、今の日本人にやや欠けているところではないかと思うようになりました。

「君が代」を大きな声で歌えますか

日本人は君が代を声高らかに歌っているでしょうか。小学校や中学校、高等学校で、若者がしつかり前を見て、目を輝かして国歌を歌ってほしいと願っています。日の丸や君が代については、私達日本人が経験した戦争という痛ましく耐えがたい記憶の中で、国家神道の象徴と軍国主義を連想させ、遺伝子に組み込まれた拒絶反応のごとくありました。

しかし、自分の国に誇りを持ち、自分の学校に誇りを持ち、自分の家族に誇りを持つ。そして自分自身に誇りを持つことがいかに大切であるかということ。誇りを持つということは、自分の行動に責任を持つということ、大人が子供達に伝えなければならないと思います。国際大会の表彰式で日の丸が真ん中のポール

に上がり、君が代を歌う時の心の高まりを、特に若者達に感じてほしいものです。

私と空手道

私は幼い頃から小柄だったため、強い者にあこがれて空手道を習い始めました。高校時代は道場で、大学では体育会の空手部に入部し、就職後も道場に通い、現在まで36年間、常に上を目指して続けてきました。

大学は私が在籍する間に2回も全日本選手権で優勝した名門校だったのですが、私自身は4年間で一度もレギュラーになれませんでした。卒業後も国体4位入賞が最高の成績で、いわゆるトップアスリートにはなれなかったのです。34歳まで現役で試合に出場し、その後、県連盟の強化委員長など選手の育成に努めました。私には向いていなかったようです。

その後審判員に転向してからは、これが私の進む道と思い、一つ一つ資格に挑戦して、始めた頃は自分でも想像していなかった国際審判員を務めるまでになりました。大学選手権でも審判員を務めています。日本武道館の観客席から母校を応援していた学生時代。今は決勝戦でセンターコートの主審の位置に立ち、そこから見上げる観客席に30年前の自分が座っているようで、時の積み重ねを感じています。

競技スポーツの世界に傾注してきた私ですが、就職を機に市民体育館でサークルを立ち上げて、週1回ですが和気あいあいと空手道を楽しむ仲間達がいいます。そこでは子弟関係もなく月謝もありません。会場費を割り勘して、一日でも早く始めた人が次に入ってきた人に知っていることを教え合う、これをモットーにしています。27年続いているこのサークルのメンバーは、私の大切な友人達です。

素晴らしいボランティア仲間

私が今までの人生で、最も長く続けているのは空手道です。次に仕事、その次は仕事より1年短い地域のボランティアがあります。一人暮らし高齢者の給食サービスで、昭和58年に発足した「ボランティアサークル永山」と言います。

私が市職員となつてまず地域の公民館勤務となり、その2年目に公民館婦人学級の方々の発案により立ち上がりました。全員が主婦ということもあって、宅配する車と運転手が足りなくメンバーになったのがきっかけです。3年目に公民館からは異動となりましたが、その後も宅配ボランティアを続けています。たつた月に1度ですが、自分に無理のない範囲で、止めずに続けることが大切だと思っています。

空手道と同様に、一つのことを長く続

けるということは、今振り返ってみても感慨無量です。ボランティア仲間は年齢性別を超えて、私の最も大切な財産の一つです。ここまでできたら生涯続けるつもりでいます。

今でこそ給食サービスは全国的に広まっていますが、発足当初は社会福祉協議会から地域内の高齢者の名簿をもらうのにも一苦労した思い出があります。記念すべき第1回目の宅配日の前日に雪が降り、こわごわ運転したのが昨日のようです。メンバーは発足当初からほとんど変わっていません。20歳そこそこだった私が50歳を超えたのですから、当時若々し



長年付き合っている給食ボランティアの仲間達と



市民体育館で立ち上げた仲良しサークルの仲間達と

かった奥様方も、もう高齢者と呼ぶにふさわしい方も多くなってきました。中には、給食を届ける人の方が受け取る人より年上ということもあります。

こんな光景を目の当たりにし、他にも職業柄地域の問題に取り組んでいると、この高齢社会を支えていくのも、地域の高齢者の方々ではないかと思えます。元気な高齢者が支えるまちづくりです。現実には、地域のボランティアの方々、ファミリーサポートセンターの協力会員、介

護予防のための健康体操の指導者達は、皆元気な高齢者の集まりです。団塊の世代と呼ばれる方々がリタイアの時期を迎え、フルタイムで地域活動ができるパワー集団が地域の財産となっているのです。これは私の町だけでなく、全国的な傾向ではないでしょうか。

ボランティアサークル永山の仲間とは、年に2、3回飲んでいます。皆私を市の職員としてではなく、サークルの仲間として接してくれるのがとても嬉しいのです。

地方公務員として

私達公務員は一住民として地域の中で果たす役割が期待されているのではないのでしょうか。特に地方公務員は転勤がなく、勤務地内または近隣に住居を構え、通勤時間も短い方が大半だと思います。何よりも、地域の活動に馴染みがあり取り掛かりやすい環境にあります。職員一人一人が、何か一つ地域活動に参加して住民の目線を知ることにより、行政運営にもそれを活かすことができれば、地域活動の活性化と合わせて一石二鳥です。

私が空手道をここまで続けてこられたのも、公務員という職場環境によるところが大きかったように思います。その意味でも、私は地域への恩返しを意識していますし、定年退職後、地域の力となつ

て活躍している先輩方が大勢いらつしやる。私もそれに続けたいと思います。

支えてくれる家族と 職場の仲間達

最後に最も感謝すべき人達に敬意を表さなければなりません。家族と職場の仲間達です。毎年4月から11月までの祝日、土曜、日曜日はほとんど空手の活動に費やしています。世界大会では2週間ほど日本を留守にします。「私のしていることは間違っているのではないか」という疑問に取りつかれた時期もありました。

1週間のうち5日家を留守にすれば、後の2日で何倍も家族を愛し、職場を空けた分だけ勤務には自分の持てるものを120%仕事に打ち込む。人のできない経験をしている分、経験したことを伝え、私の行動や考え方が家族や周りの人々に少しでも役に立ててもらえるよう、自分を戒め謙虚な気持ちで日々を過ごすことが、私に与えられた使命だと考えるようにしています。

まだ小学校2年生と5年生の娘達が、やがて成長して嫁に行き自分の子供を持つ頃に、私のことを思い返して何と云うか、それが私の正しい評価になると思っています。